

常磐海域におけるマアナゴの生態の解明

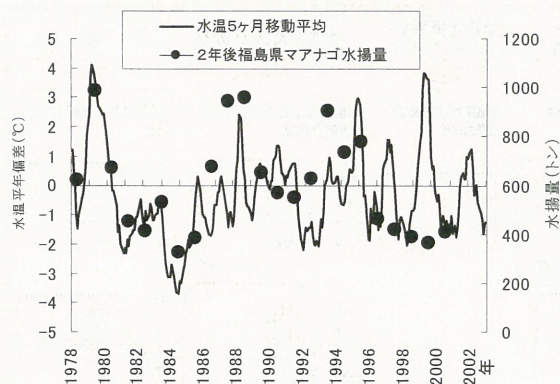


図1 沿岸水温年平均偏差の推移と2年後のマアナゴ水揚量



全長12cmのマアナゴ孔魚



全長40cmのマアナゴ

表1 常磐海域におけるマアナゴの成長

満年齢	全長 (cm)	体重 (g)
0.3	10~12	2~3
1	25~30	25~40
2	30~50	40~200
3	40~65	100~450
4	50~85	200~1,000
5	55~90	260~1,300
6	60~90	360~1,300

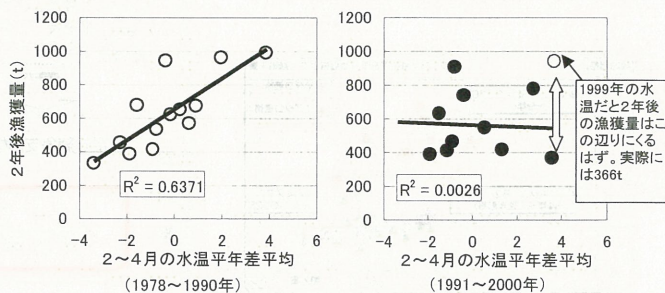


図2 2~4月の水温年平均差と2年後のアナゴ漁獲量

福島県沿岸の水温とマアナゴの漁獲量との関係を解析した結果、水温が高い年の2年後には漁獲量が増加し、低い年の2年後には減少することがわかりました(図1)。しかし、近年だけを見るとその関係は認められず(図2)、その要因の一つとして、マアナゴの仔魚の漁獲が影響している可能性が推測されました。また、マアナゴの成長を調べたところ、満1歳で全長25~30cm、満2歳で30~50cmと成長が速いことがわかりました(表1)。

キーワード▶▶マアナゴ 資源管理

福島県におけるマアナゴの漁獲量は変動が大きく、近年は減少傾向にあることから、その要因を明らかにし、マアナゴ資源の適切な利用方法を漁業者に提示することを目的に研究を行いました。

マアナゴの仔魚は、日本の南方海域から黒潮に運ばれ日本沿岸に来遊するといわれています。そこで黒潮の強弱の指標として沿岸水温を整理し、マアナゴの漁獲量との関係を調べたところ、マアナゴの漁獲量変動には黒潮の強弱が関係していることが推測されました。しかし、1991年以降についてはこの関係が認められず、他の要因

も影響していることが考えられました。検討の結果、1991年以降はマアナゴの仔魚の漁獲が行われており、この影響が要因の一つと推測されました。また、マアナゴの成長が速いこともわかったことから、仔魚や小型魚を保護して、より大きな魚を獲ることが経済的であることを漁業者に対して提言しました。

今後はマアナゴの資源動向や生態をさらに詳しく調査し、資源の適切な利用方法を検討していきます。

担当者 相馬支場 根本芳春
石田敏則